

平成 22年 6月 18日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20830144

研究課題名（和文） 軽度の発達障害のある若者を対象とした就労準備支援教材の開発に関する研究

研究課題名（英文） Study of developing work preparation workbook for young persons with developmental disorders

研究代表者 寺田 容子（Terada Yoko）

国立障害者リハビリテーションセンター（研究所）・福祉機器開発部 流動研究員

研究者番号：00510596

研究成果の概要（和文）：発達障害のある若者に必要とされる就労準備に向けた「学習内容」、ならびに、「学習内容のワークブック上での呈示方法」のポイントを教育機関、就労支援機関の指導者に対する調査から明らかにした。調査結果をふまえ、必要な学習内容ならびに呈示方法を把握するための2つのチェックリストを開発した。また、2つのチェックリストを参考とし、発達障害のある高校生向けのワークブックを試作開発した。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed “contents of learning” and “presentation methods” of workbook for work preparation of young persons with developmental disorders. Questionnaire investigation was carried out for supervising instructors in school educational institutions or work support organizations. Two checklists about “contents of learning” and “presentation methods” were developed based on the results of this investigation. I made a prototype of the workbook for work preparation of young persons with developmental disorders in reference to these checklists.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,370,000	411,000	1,781,000
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,570,000	771,000	3,341,000

研究分野：特別支援教育学

科研費の分科・細目：軽度発達障害

キーワード：発達障害，就労準備教育，キャリア教育，ワークブック，チェックリスト

1. 研究開始当初の背景

（1）発達障害のある若者の学校から就労への移行の難しさ

近年、LD、ADHD、高機能自閉症等（以下、発達障害）のある若者の学校から就労への移行の難しさが問題視されている。具体的には、高等学校等の在学時に、就労に関して十分な

支援がなされない場合、自分に適した進路を選ぶことができず、モラトリアム的に進学したり、行き場をなくし、フリーターやニートの道を選んでしまうことが懸念されている。実際、学校卒業直後の在宅者の比率は、高卒よりも、大卒の方が高く、高学歴になると、逆に、職につくことが難しくなること（内

藤・山岡, 2007), また, 首都圏にある就職・自立支援施設では, ニートの若者のうち, 約 2 割に発達障害・またはその疑いがあることが報告されている(読売新聞, 2006)。さらに, 例え, 進路を選ぶことができたとしても, 選んだ進学先や就労先で, 苦手なことに対して理解や支援が得られなかったり, 対人関係をこじらせてしまい, 結局そこでの活動の継続を断念せざるを得ない状況に陥ってしまうことが懸念されている。実際, 一般枠で就労した場合, 初職での離職率は約 6 割であり, そのうち, 1 年以内の離職率は約 4 割とも報告されている(内藤・山岡, 2007)。

上述の問題を回避するためには, 学校教育段階において, 発達障害のある若者が就労について必要な意識や知識を高め, 自己に適した就労内容の検討とそれに基づく効果的な進路選択を行えるよう支援することが必要である。

(2) 発達障害のある若者の就労準備支援のためのワークブック開発の必要性

今後, 発達障害のある若者の学校教育から就労への移行を支援するためには, 学校内外で容易に取り組みやすいような, 就労準備を可能とするための具体策を提供することが必要である。しかし, 我が国では, 発達障害のある若者が就労準備学習時に活用できるツールが乏しい。

既存のツールとしては, 学校でのキャリア教育時に用いられる, 一般生徒用のワークブック形式の教材がある。ワークブックの利点は, 「様々な情報内容を網羅・精選できる点」「情報内容を学習者に応じた形で, 分かりやすく, 目に見える形で呈示できる点」「冊子という形態から持ち運び可能であり, 必要な時に必要な場所で, 繰り返し学習内容を確認できる点」である。そのため, 現在は, ワークブック形式のキャリア教育教材が多く作成され, 学習の導入やまとめ時に, 活用されている。

ところが, 既存の一般教材は, 発達障害のある若者の障害特性を踏まえたものになっておらず, 彼らの「就労に必要な情報内容が網羅・精選されていない点」「情報処理の困難さを考慮した, 分かりやすく, 記憶に残りやすい情報呈示がなされていない点」に問題がある。発達障害のある若者は, 多くの場合, 情報の整理・統合に難しさがあり(石井, 2005), これにより, 座学で得た知識や体験した出来事を体系的に蓄積することができない, という問題を抱えている。

2. 研究の目的

本研究は, 発達障害のある若者の学校から就労への移行を支援するための, 効果的な「就労準備支援教材」を開発することを目的

とする。そのために, 本研究では, 2 年間で, 次の大きく 3 つの目標を達成する。

(1) 発達障害のある若者の就労準備に必要なとされる「学習内容」の把握とそのチェックリスト化

(2) 発達障害のある若者に, 就労準備に向けた学習内容をワークブックで分かりやすく学ばせるための「学習内容の呈示方法」の把握とそのチェックリスト化

(3) 2 つのチェックリストの内容をふまえた「発達障害のある若者向けの就労準備支援ワークブック試案」の開発

3. 研究の方法

(1) 発達障害のある若者の就労準備に必要なとされる「学習内容」の把握とそのチェックリスト化

予備調査: まず, 発達障害のある若者の就労準備について必要な情報を抽出するためにターゲットとすべき文献を検討する作業を行った。次に, それらの文献から, 発達障害のある者の「仕事理解」「自己理解」の促進に関わる情報を収集した。そして, それらの情報をもとに, 発達障害の若者が学ぶべき学習内容に関する項目候補を作成した。なお, 項目は, 網羅性を考慮しつつも, 回答者の負担を考慮し, 評価項目が多くなりすぎないように 30 項目を超えないこと目安に作成した。そして, 定めた枠の中で, 必要な視点をすべて収め, かつ, その視点を項目化した際に, ある項目だけ具体的にすぎたり, 逆に抽象的にすぎないように配慮し, 項目候補を作成した。

質問紙調査: 就労支援機関(地域障害者職業リハビリテーションセンター, 就業・生活支援センター, 職業能力開発校, 発達障害者支援センター)ならびに教育機関(高校, 特別支援学校)の指導者のうち, これまでに就労準備支援経験のある者から, 作成した項目候補についての重要度の評価をそれぞれ 6 件法で受けた。

チェックリスト作成: の結果について, 因子分析を実施し, 得られた因子を「大項目」, 因子に属する項目を「中項目」, そして, の文献で得られた情報を中項目に割り当てて「下位項目」とする, チェックリストを作成した。

(2) 発達障害のある若者に, 就労準備に向けた学習内容をワークブックで分かりやすく学ばせるための「学習内容の呈示方法」の把握とそのチェックリスト化

予備調査: まず, 発達障害のある若者向けのワークブックを作成する際の留意点につ

いて、就労支援機関ならびに教育機関の指導者から自由記述で情報を収集した。その後、それらの情報をもとに、発達障害の若者に就労準備に向けた学習内容をワークブックで分かりやすく学ばせるための「学習内容の呈示方法」について項目候補を作成した。なお、項目は、網羅性を考慮しつつも、回答者の負担を考慮し、評価項目が多くなりすぎないように 30 項目を超えないこと目安に作成した。そして、定めた枠の中で、必要な視点をすべて収め、かつ、その視点を項目化した際に、ある項目だけ具体的になりすぎたり、逆に抽象的になりすぎないように配慮し、項目候補を作成した。

質問紙調査：就労支援機関ならびに教育機関の指導者のうち、これまでに就労準備支援経験のある者から、で作成した項目候補についての重要度の評価をそれぞれ 6 件法で受けた。

チェックリスト作成：の結果について、因子分析を実施し、得られた因子を「大項目」、因子に属する項目を「中項目」とするチェックリストを作成した。

(3) 2 つのチェックリストの内容をふまえた「発達障害のある若者向けの就労準備支援ワークブック試案」の開発

(1) で作成したリストの「大項目」を参考に、ワークブックの目次を作成した。また、目次に対応する各セクションの内容は、チェックリストの「中項目」の内容を網羅しつつ作成した。また、必要に応じて「下位項目」の内容をもとに、情報の具体化を行った。そして、それらの内容について、(2) で作成したリストを参考に、発達障害のある者が分かりやすく学べるよう配慮しつつ、「発達障害のある若者向けの就労準備支援ワークブック試案」を試作開発した。

4. 研究成果

(1) 発達障害のある若者の就労準備に必要なとされる「学習内容」の把握とそのチェックリスト化

ワークブックに必要な情報としては、まず、「通常教育で取り組まれているキャリア教育の学びの促進を支援することで、通常の枠組みでの就労(手帳を活用しない就労)が可能な者を増加させる必要性」から、「キャリア教育の視点」が必要であると考察された。一方で、発達障害のある者のうち、「特に著しい困難さを抱える者」が自分の障害を理解し、必要に応じて、職業リハビリテーションを経て、法定雇用率制度を活用した就労に進みやすくできるようにする必要性から、「職業リハビリテーションの視点」が必要である

と考察された。これより、ワークブックには、「キャリア教育」「職業リハビリテーション」の情報を併せて盛り込むことにした。

既存のキャリア教育の文献、職業リハビリテーションの文献 30 点から収集した情報をもとに、発達障害のある者が就労準備に向け学ぶべき項目として 28 個の項目候補を作成した。その後、専門家の意見を反映させた結果、26 個の項目候補へと修正した。これについて、発達障害のある者の就労準備プログラムに携わる実践者(大学院生)2 名から、内容の「妥当性」と「分かりやすさ」について評価を受けた結果、「内容が妥当」と判断された割合は、評価者 A 100%、評価者 B 96%であった。「分かりやすい」と判断された割合は、評価者 A 77%、評価者 B 88%であった。2 名から得た意見をふまえ、ワーディングを見直した 26 個の項目候補が最終的に作成された。なお、この 26 個の項目候補の内容と、各種省庁で提案されているキャリア教育、職業リハビリテーションに関する枠組み(「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(国立教育政策研究所生徒指導研究センター, 2002)」「社会人基礎力(社会人基礎力に関する研究会, 2006)」「職務遂行のための基本的能力(厚生労働省)」「就労移行支援のためのチェックリスト(高齢・障害者雇用支援機構・障害者職業センター, 2006)」)の内容について対応関係を確認した結果、両者の視点を併せて満たしていることが確認された。

の項目候補に対して、現場のニーズをふまえて整理・分類し、就労準備に関する学びのポイントを抽出するために因子分析を行った($n=226$)。その結果、<因子 1: 職業観、勤労観の形成>、<因子 2: 障害者枠での就労に関する知識の獲得>、<因子 3: 就労時に求められる能力からみた自分に合った働き方の理解>、<因子 4: 現実を見据えた進路選択方法の理解>、<因子 5: 効果的なキャリア設計の理解>、<因子 6: 自分の特性に応じた仕事内容の理解>の 6 つの因子(表 1)が抽出された。

(2008 年度研究業績報告書の因子名から一部修正有り)

表 1: 発達障害のある者に必要な学習内容

因子 1: 職業観、勤労観の形成
・「働くことの必要性」の理解
・「仕事をしてお金をかせぐしくみ」の理解
・「働くことの意義」の理解
・「職業人の生活像」の理解
因子 2: 障害者枠での就労に関する知識の獲得

- ・「障害者雇用率制度を活用した就職で多い職種とその特徴」の理解
- ・「障害者雇用率制度を活用した就職で多い雇用形態・勤務形態とその特徴」の理解
- ・「障害者雇用率制度を活用した就職に必要な手続き」の理解

因子3：就労時に求められる能力からみた自分に合った働き方の理解

- ・「働く上で必要な業務面での態度やスキル」の理解
- ・「自分自身の障害（著しい困難さ）と有効な対処方法」の理解
- ・「働く上で必要な対人関係面での態度やスキル」の理解
- ・「働く上で必要な生活面での態度やスキル」の理解
- ・「自分に合った雇用形態・勤務形態」の理解
- ・「通常の就職に必要な手続き」の理解

因子4：現実を見据えた進路選択方法の理解

- ・「高校卒業後の選択肢とその特徴」の理解
- ・「様々な雇用形態・勤務形態とその特徴」の理解
- ・「通常の就職を支援してくれる機関とその支援内容」の理解
- ・「障害者雇用率制度を活用した就職を支援してくれる機関とその支援内容」の理解
- ・「様々な職種とその特徴」の理解
- ・「進路選択に必要な知識・スキルの獲得方法」の理解

因子5：効果的なキャリア設計の理解

- ・「キャリアデザインの意味と重要性」の理解
- ・「キャリアデザインの方法」の理解
- ・「就労に関する社会の動向」の理解
- ・「就労に関する法律」の理解
- ・「自分に合った進路先」の理解

因子6：自分の特性に応じた仕事内容の理解

- ・「自分自身の特性やこれまで積み上げてきた経験」の理解
- ・「自分にあった職種」の理解

上の6つの就労準備に関する学習内容のポイントについて、指導上の優先度を確認することをねらいとして、「発達障害のある人への就労準備支援経験」がある者は、因子1～6のうち、どれをより高く重要であると評価しているかについて確認した。分散分析を行った結果、因子6＝因子3＞因子1＞因子4＞因子2＝因子5の順で、有意な差があり、これら6つの学習要素の優先度が確認された。

上の分析で抽出された因子をチェックリストの「大項目」とし、26項目の学習項目を「中項目」として割りあてたりリストを作成し

た。また、その学習優先度についても指針としてまとめた。

（2）発達障害のある若者に、就労準備に向けた学習内容をワークブックで分かりやすく学ばせるための「学習内容の呈示方法」の把握とそのチェックリスト化

全国の教育機関・就労支援機関の指導者100名から得た自由記述データをもとに、発達障害の情報処理特性を考慮した「情報呈示方法」に関する30個の項目候補を作成した。

の項目候補に対して、現場のニーズをふまえて整理・分類し、情報呈示時に重要視すべきポイントを抽出するために因子分析を行った（ $n=250$ ）。その結果、＜因子1：ワークブックの要点の押さえやすさ＞、＜因子2：ワークブックからの情報の抽出のしやすさ＞、＜因子3：ワークブックの活用のしやすさ＞、＜因子4：ワークブックの基本的利用のしやすさ＞、＜因子5：ワークブックの情報の誤りのなさ＞、＜因子6：ワークブック使用による自尊心の低下への配慮＞、＜因子7：ワークブックへの親しみやすさ＞の7つの因子が抽出された（表2）。

表2：発達障害のある者の情報処理特性を考慮したワークブックへの「情報呈示方法」

因子1：ワークブックの要点の押さえやすさ
<ul style="list-style-type: none"> ・情報の構造化が使用者に分かりやすい形になっている ・使用者が内容を押さえやすいデザインになっている ・どの情報がどこに載せられているか見当がつきやすいようなデザインになっている ・分かりやすい文章で書かれている。 ・情報を読み取りやすいデザインになっている ・使用者の問題解決に役立つ内容が多数載せられている ・重要ポイントを把握しやすいデザインになっている
因子2：ワークブックからの情報の抽出のしやすさ
<ul style="list-style-type: none"> ・1ページに適切な量の情報が載せられている ・情報の構造化に一定のルールがある。 ・1冊あたりに適切な量の情報が載せられている
因子3：ワークブックの活用のしやすさ
<ul style="list-style-type: none"> ・使用者が活用しやすいデザインになっている ・情報を記入しやすいデザインになっている ・使用者が共感できる内容になっている。

- ・使用者にとって参考となる事例が多数載せられている
- ・教材の使用対象が明確に書かれている。
- ・情報が信頼できる形で載せられている。
- ・図表・イラスト・写真・フローチャートなどが効果的に活用されている

因子4：ワークブックの基本的利用のしやすさ

- ・学習内容を把握しやすいデザインになっている
- ・知りたい情報がどこにあるか探しやすいようなデザインになっている
- ・取り扱いやすいデザインになっている。
- ・図表・イラスト・写真・フローチャートなどが正しく作成されている
- ・使用者がプランニングをしやすいデザインになっている

因子5：ワークブックの情報の誤りのなさ

- ・正確な文章が用いられている
- ・適切な用字・用語が用いられている
- ・情報が語弊がない形で載せられている

因子6：ワークブック使用による自尊心の低下への配慮

- ・使用者のプライドに配慮したデザインになっている
- ・障害という言葉の取扱いに配慮している

因子7：ワークブックへの親しみやすさ

- ・手に取って読んでみたくなるデザインになっている
- ・親しみやすい文章で書かれている

上の7つの情報呈示方法に関するポイントについて、その優先度を確認することをねらいとして、「発達障害のある人への就労準備支援経験」がある者は、因子1～7のうち、どれをより高く重要であると評価しているかについて確認した。分散分析を行った結果、最も高く重要と評価されていたのは、<因子1：ワークブックの要点の押さえやすさ>、<因子2：ワークブックからの情報の抽出のしやすさ>、<因子5：ワークブックの情報の誤りのなさ>であった。

上の分析で抽出された因子をチェックリストの「大項目」とし、30個の学習項目を「中項目」として割りあてたりリストを作成した。

(3)2つのチェックリストの内容をふまえた「発達障害のある若者向けの就労準備支援ワークブック試案」の開発

2008年度に作成した「情報内容チェックリスト」と2009年度に作成した「情報呈示方法チェックリスト」をふまえ、就労準備支援教材(案)を試作開発した(図1)。

なお、作成にあたっては、既存の教材の内容、ならびに、情報呈示手法を両チェック

リストの視点から分類し、整理した資料(図2)を参考にした。

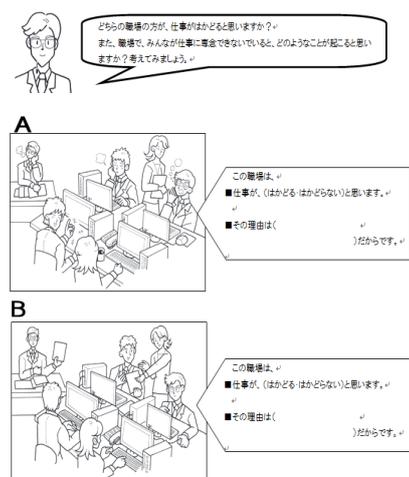
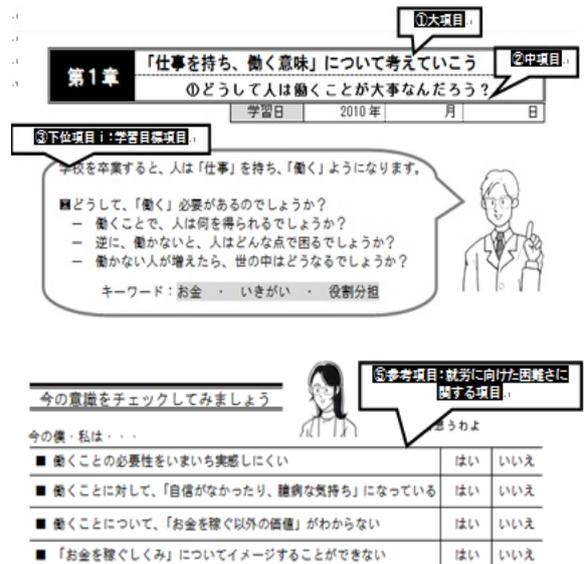
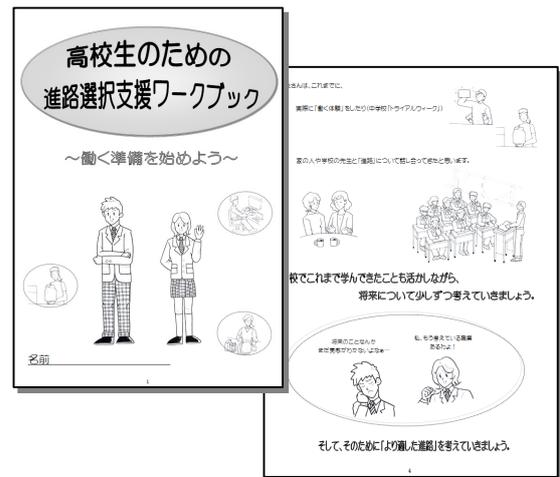


図1：ワークブック試案(抜粋)
(吹き出し部は、チェックリストとの対応関係を示す)

文庫名	ページ数	概要	教材の特徴(○は有業を示す)			
			指導内容・方法	ワークシート	ビデオ	事例
1 職場体験 フラスコの生き方学習 発達障害と人間関係の大切さ	120	職場体験は「生き方の総合的学習の場、学びの職場体験学習の場」を目的とする。	○	○	○	○
217 職場体験の意義と意義 職場体験学習の意義(1)目的	217	職場体験の意義と意義 職場体験学習の意義(1)目的	○	○	○	○
420 生涯にわたる学習者としての職場体験の意義	420	生涯にわたる学習者としての職場体験の意義	○	○	○	○
444 発達障害者の職場体験の意義と意義(1)目的	444	発達障害者の職場体験の意義と意義(1)目的	○	○	○	○
450 発達障害者の職場体験の意義と意義(2)目的	450	発達障害者の職場体験の意義と意義(2)目的	○	○	○	○
500 発達障害者と社会(1)発達障害者の社会生活	500	発達障害者と社会(1)発達障害者の社会生活	○	○	○	○
600 発達障害者と社会(2)発達障害者の社会生活	600	発達障害者と社会(2)発達障害者の社会生活	○	○	○	○
660 発達障害者と社会(3)発達障害者の社会生活	660	発達障害者と社会(3)発達障害者の社会生活	○	○	○	○
720 「私の職業は何か?」発達障害者の職業生活	720	「私の職業は何か?」発達障害者の職業生活	○	○	○	○
740 「今日一日に何をしよう?」発達障害者の職業生活	740	「今日一日に何をしよう?」発達障害者の職業生活	○	○	○	○
750 発達障害者の職業生活(1)職業生活	750	発達障害者の職業生活(1)職業生活	○	○	○	○
800 発達障害者の職業生活(2)職業生活	800	発達障害者の職業生活(2)職業生活	○	○	○	○
2 「キャリア教育」のあり方(1)中学校編	444	「キャリア教育」のあり方(1)中学校編	○	○	○	○
444 「キャリア教育」のあり方(2)中学校編	444	「キャリア教育」のあり方(2)中学校編	○	○	○	○
750 「キャリア教育」のあり方(3)中学校編	750	「キャリア教育」のあり方(3)中学校編	○	○	○	○

図 2：既存の教材の整理資料（抜粋）

(4) 研究の成果と今後の展望

本研究では、発達障害のある者への就労準備教育をテーマとした研究に我が国で先駆的に取り組んだ。

そして、調査研究を通し、「就労準備に向け、発達障害のある者に何を学ばせる必要があり(学習内容の把握)」、それを彼らが分かりやすく学べるよう「どのような仕様の座学教材により学ばせていくとよいか(学習内容の呈示方法の把握)」,基本的方針を把握することはできた。また、それらの知見をもとに、「発達障害のある者が就労準備に向け学ぶべき内容」と「発達障害のある者の情報処理特性をふまえた情報呈示方法」を、系統的な形で網羅・可視化したチェックリストを作成することができた。

今後は、本教材が地域でよりよく活用される上で重要となる、「誰が、本教材をどのように使い、どのように学ばせていくとよいか(教材のユーザー、使用方法の設定)」,そのようにして取り組まれた「本教材を用いた指導は本当に効果があるか(有効性の把握)」を明らかにしていく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者,研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

寺田容子・滝口圭子・武澤友広・落合俊郎, 特別支援教育のハンドブックの使いやすさを高める要因とその充足の効果の検討: 通常の学級での特別支援教育の充実に向け, LD 研究, 日本 LD 学会, 17 号, 2 巻, pp61-70, 2008

[学会発表](計4件)

寺田容子, 教育段階からできる職業観・勤労観を高め「業務面」のスキルを向上させる取り組みとは? (寺田容子・宮本昌子・滝口圭子・ソルト〔当事者仮名〕・くま〔当事者仮名〕, 当事者との対話から考える,

就労を見据えた教育のあり方), 日本 LD 学会第 17 回大会, 広島大学, 11 月 22-24 日, 2008

滝口圭子・寺田容子・今塩屋優美, 発達障害のある中学生の就労を見据えたキャリア教育プログラム: カフェプログラム Café Blue Sky の実践, 日本 LD 学会第 18 回大会, 東京学芸大学, 10 月 10-12 日, 2009

庄司百合子・寺田容子・大平将仁・新堀和子・松為信雄 (2009) 発達障害の生徒と親によるキャリア教育の実践(3): 理解しやすい講座の特徴とは?, 日本 LD 学会第 18 回大会, 東京学芸大学, 10 月 10-12 日, 2009

寺田容子・庄司百合子・大平将仁・新堀和子・松為信雄, 発達障害の生徒と親によるキャリア教育の実践(2): キャリア教育プログラムの効果とその関連要因, 日本 LD 学会第 18 回大会, 東京学芸大学, 10 月 10-12 日, 2009

[その他](計1件)

報道関連情報(TV 取材): NHK 首都圏ネットワーク「発達障害 働く体験通じて社会へ」 2009 年 9 月 10 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺田 容子 (Terada Yoko)
国立障害者リハビリテーションセンター (研究所)・福祉機器開発部 流動研究員
研究者番号: 00510596

(2) 研究協力者

松為 信雄 (Matsui Nobuo)
神奈川県立保健福祉大学・教授
研究者番号: 20383127

井上 剛信 (Inoue Takenobu)
国立障害者リハビリテーションセンター (研究所)・福祉機器開発部 部長
研究者番号: 40360680